

はじめに

兵庫県神戸市に生まれた私は、幼少期を愛媛の松山、そして香川県の牟礼町で過ごした。

小学3年生のときに野球を始めたあたりから、勉強の成績は坂道を転がるように下がっていった。私に通っていた香川県の牟礼町立牟礼北小学校では、成績が「もう少し」「普通」「良い」の三段階で評価されるのだが、小学1年生のころ、当時小学5年生だった兄の通知表を見た。通知表は「国語」「算数」などの教科ごとに四つほど項目が並んでいて、それぞれが「もう少し」「普通」「良い」で評価される仕組みだ。ところが兄の「良い」は、音楽のわずか二つだけだった。私は得意げに「あほのゆうき」と呼んでからかっていた。

しかし皮肉なことに、自分が小5になった頃には「良い」が体育のたった一つだけ。兄を笑っていた自分が、同じ道を歩んでいたのである。

塾には一切通わなかった私だが、中学に入って最初の試練が訪れる。「中間テストで学年50位以内に入らなければ塾へ入る」という親との約束。牟礼中学校の同級生は234人。宿題以外の勉強をしたことのなかった私は、初めて本格的にテスト勉強に取り組んだ。その結果は39

位。ギリギリで塾行きを免れた。

ところが、野球部に入ったのち、14歳で実戦空手にのめり込み、そしてテレビゲームにも夢中になっていった。担任の先生は親にこう告げたという。

「学年でトップクラスに勉強しない子です」と。

そんな折、中学2年生のとき、「良い」がたった二つしか取れなかった兄（ゆうき）が関西大学に合格した。兄は香川県立高松北高校（北高）で着実に成績を積み重ね、推薦を勝ち取ったのだ。山あいの地元では「すごい、すごい」と噂になった。

「兄ができたなら、自分もできるはずだ。自分も北高に行って推薦をもらえば、空手と野球に集中できる」

そう信じて、私は北高への進学を決めたのだった。このときはまだ知らなかった。偏差値30台の凡人が、やがてUCLAで政治を学び、外務省で外交官としてロシアに7年勤め、そして国政に挑むことになるなどと。すべてはこの「兄への対抗心」と「凡人の逆襲」から始まったのだ。